

シコクビエの品種特性について

露重美義・宝満正治・持留信雄・*早崎東内

(鹿児島県農業試験場 *大隅農業改良普及所)

TSUYUSHIGE, M., HOUMAN, M., MOCHIDOME, N. and HAYASAKI, T.

On the Characteristics of some Varieties of African millet.

シコクビエは瘦地や転換畑など適用範囲が広く初期生育旺盛で、ローズグラスなど初期生育の遅い草種との混播に適した牧草である。九州南部での栽培は多いと推察されるが、再生や病虫害などの問題も指摘されている。筆者らは国内、インド系など7品種について若干の検討を試みたので結果を報告する。

1. 試験の方法

供試7品種(第1表)で5月8日(1974, '75)には種し、施肥は基肥N:0.5, P₂O₅:2.5, K₂O:0.5(75は1.0-2.0-1.0), 追肥N:1.0, K₂O:1.0kg/aを刈取毎施した。調査は株間30cm個体植えによる出穂成熟調査、散播(は種量0.2kg/a)での再生と収量調査、25×25cm個体植えによる再生調査を行なった。

第1表 生育と出穂および穂型

品 種 名	草丈 cm	出穂期		穂 型
		月 日	月 日	
祖 谷 在 来	106	8. 6	9. 23	展 開 型
秋 山	98	7. 27	9. 23	展 開 型
P U R N A	118	8. 4	9. 23	先端彎曲型
ANNAPURNA	116	8. 22	10. 18	先端彎曲型
R O H - 2	122	8. 26	10. 21	先端彎曲型
R A P O K O	113	8. 26	10. 15	げんこつ型
雪印改良シコクビエ	113	8. 23	10. 26	げんこつ・ 彎曲型

2. 結果および考察

出穂は7月下旬から始まり、8月上旬に出穂する早生群と同月下旬出穂の中晩生群に大別でき、いずれも成熟にかなりの日数を要した。国内種はやや短稈多けつで前者に属し、インド系雪印系は後者に属するが、Purnaのみは早生である。穂型は一般に分類されている3型でみると国内種は展開型、他は先端彎曲およびげんこつ型で雪印系は混在していた。またげんこつ型は穂長短く多くの分枝穂からなっている。

散播での各刈取期茎数は1番草に比し2番草で半減、3, 4番草で各々40, 30%とほぼ同様な減少傾向で品種間差異はなく、後述する収量との関連性も認められない。

このことは再生茎数のみが刈取量に結びつかないことを示すものと考えられる。収量(第2表)は、各番草ともに比較的安定して生産のあったPurna, AnnaPurnaは総収量で優り、変動の著しい国内種と2番草以後漸次低下した他品種は生草で800kg/a程度であった。これらのことは個体植えによる再生調査でもほぼ同様で国内種は刈取時期が遅くなる程低い草丈でも出穂し、また中晩生種は比較的一応の生育を示すが欠株率も増加したのに比べ、上記2品種は欠株率も低く、再生芽の生育も良好であった。しかしながらいずれの品種も9月以降の再生茎利用の期待は薄いものと思われる。

第2表 刈取期別収量 (kg/a)

品種名	区分	6月27日	7月23日	8月20日	9月22日	合 計
祖谷	生草	275	134	275	109	793
	乾物	29.7	17.8	37.8	20.5	105.8
秋山	生草	290	151	235	127	803
	乾物	31.9	19.9	35.3	25.4	112.5
P	生草	306	243	243	147	939
	乾物	34.3	30.1	32.6	29.2	126.2
AP	生草	263	240	287	120	910
	乾物	29.2	29.4	36.7	21.4	116.7
R-2	生草	257	215	193	121	786
	乾物	28.3	26.4	26.2	24.5	105.4
RP	生草	274	215	163	191	843
	乾物	31.3	27.5	24.9	34.6	118.3
雪印	生草	291	203	112	167	773
	乾物	34.4	26.7	18.4	31.1	110.6

虫害について外見で食害茎の調査を行なった。7月中旬から食害が目立ち、2番草刈取時約30%の食害茎率でその後減少はするものかなりの食害があったが、品種間差は明確でなかった。上記調査は手刈によるもので機械刈や刈取ステージにより再生が異なることも考えられ、さらに検討が必要であろう。